

第6学年 道徳科学習指導案

新潟県糸魚川市立田沢小学校
授業者 教諭 池田 利充

1 主題名 あきらめないで A [希望と勇気、努力と強い意志]

2 教材名 「字を書きたい！」(出典：星野富弘『愛、深き淵より。』学習研究社 2000 ※一部抜粋・改作)

3 主題設定の理由

(1) ねらいとする道徳的価値

子どもたちが一人の人間として自立し、自分で自分をよりよく育てていくためには、自分がやるべきことに加え、目標をもち努力することが必要である。そこには粘り強さや忍耐力が求められる。さらに、見通しなく取り組むのではなく、希望をもつことでよりよい自己実現を目指す向上心と結び付け、前向きな自己の生き方ができるようになる。

人間は、ある人物の生き方にあこがれ、夢や希望をふくらませると同時に、自信を喪失したり、思うように結果が出なかったりして、夢と現実の違いを強く意識したりすることもある。高学年のこの時期は、子どもたちがそれぞれ高い理想を追い求める時期と言われる。このような時期であるからこそ、様々な生き方への関心を高めるとともに、自己の向上のためにより高い目標を設定し、その達成を目指して希望と勇気をもち、困難があってもくじけずに努力しようとする強い意志と実行力を育てる必要がある。またその中で、苦しくてもくじけず物事をやり抜き、失敗を重ねながらも夢を実現した人たちの様々な生き方に触れ、あきらめずに取り組む意義やその過程で得られるものに価値を見出すことも大切にしていきたい。この過程を重視することが、希望をもつことや、失敗や挫折を乗り越えようとする強さにつながり、自分で自分を育てていこうとする心に結び付いていくのではないかと考える。

(2) 教材について

本教材(資料)は、花の詩画集で知られる星野富弘さん(主人公)の実話である。不慮の事故で首から下の自由を失った主人公は、ベッドの上で天井だけを見つめる日々を過ごす。ある時、入院中に仲良くなったT君を励ますために寄せ書きを頼まれる。口にペンをくわえて書こうとするがうまくいかない。「口で字を書きたい」と目標に向かって、主人公の壮絶な努力の日々が始まる話である。この実話を通して、主人公の苦悩や前向きに生きようとする姿に共感させることは、粘り強くやり遂げようとする心情や実践意欲・態度を育むのに適している。

授業の構想では、中心発問の前の発問場面で十分に考える時間を確保する。主人公の気持ちに寄り添い、「ペア・インタビュー」を通して考える。子どもたちは黒い点が一つ付いた時の主人公の心の中を問うた時、理想と現実の違いに苦悩する気持ちと、希望をつなぐ前向きな気持ちの二つの感情を自分と重ね合わせて考えていく。これら感情を取り上げ、具体的に主人公の心の中を考えさせたい。その上で中心発問を投げ掛け、主人公の心の中を想像し、希望をもち、あきらめない前向きな心が主人公を支えていたことに気付くことで、道徳的価値の自覚を深めたい。

(4) 児童の実態

最高学年となり、責任と自覚をもち、一人ひとりが目的をもって役割を果たす姿が見られている。縦割り班活動での姿が一事例である。また、総合的な学習の時間では、昨年度から「働くことって何だろう？」のテーマの下、忙しくても大変でも働くことの意義や目的をもち、粘り強く仕事をする家族や地域の方(大人)の姿を見つめてきた。そして、学んだことを実践することで、みんなで目標や目的をもってコツコツと努力をすることの大切さを確認し合ってきた。学校行事では、自分がやらなければいけないことに加え、見通しをもち、根気強く取り組むことの大切さや、全校のために話し合ったり、声を出し合ったりしながらよりよく活動することの喜びや楽しさを味わってきている。

本学級の子どもたちは好奇心が高く、活動を工夫することで、学習課題や活動に主体的に最後まで取り組もうとする姿が高まってきている。今後も、高学年としての責任感や役割の自覚といった道徳性を育む中で、子どもたちがよりよい自己の生き方を実現していくために、さらに粘り強さや忍耐力を養い、目標達成に向けて困難なことにも勇気をもち、打ち勝ってもらいたいと願い、本主題を設定した。

4 本時の計画

(1) ねらい

あきらめないで字を書こうと努力し続けた星野さんの内面を共感的に理解し、主人公を支えていた強い心について話し合うことを通して、自分で決めたことを粘り強くやり続けようとする心情を養う。

(2) ねらいに迫る具体的な手立てー研究主題との関連からー

①主人公の生き方に興味をもって学習活動に向かうための導入の工夫

次の2点をポイントに「資料への導入」とする。

a 資料(教材)の内容理解を容易にする。 b 星野さんのよりよい生き方に興味や関心をもつ。

導入で主人公の生き方に興味をもつことが学習意欲を高め、主人公に寄り添い、自己を見つめる学習へとつながっていくと考える。星野さんの境遇や現在について、写真や絵(文字)を提示し、問いを投げ掛けることで、主人公の生き方に興味や関心をもち、主体的な学びになるよう工夫を図る。そのため、主人



公の写真や絵を精選して提示する。

②多面的・多角的な考えを促す「ペア・インタビュー」

「ペア・インタビュー」とは、2人1組になってインタビューし合う活動である。この方法は、教材提示の後、登場人物になりきってお互いにインタビューを行う。本来は、教材理解を促す役割とロールプレイングのウォーミングアップの役割を目的とするが、以下のような効果があると思われる。

- ・登場人物になりきり会話できるので、意見や考えが出しやすくなる。
- ・相手の刺激を受けて即興的に反応しなくてはいけないので、自ずと本音で語ることになる。
- ・役割を交代することで、相手の考えや意見が聞ける（他者理解）。

本時では、星野さんの立場（役割）に自己を投入し、具体的な表現活動（インタビュー）を通して、道徳的な感じ方や考え方を深めたい。また「ペア・インタビュー」後に全体で共有を行う。

展開2つ目の発問場面では、希望や自信そして苦悩や挫折・様々な思いや葛藤が主人公の心の中をかけめぐっている。この場で「必死に書いて、帽子に黒い点が一つ付いた時、どんな気持ちでしたか」と問いを絞ってインタビューする。中心発問場面直前のこの発問場で「ペア・インタビュー」を行うことで、主人公の心を奥深く想像させ、様々な気持ちで複雑に揺れる心の葛藤に気付かせたい。

また、そうすることで、次の中心発問でそれら複雑な気持ちや葛藤を乗り越えた主人公の心の強さを確認し、深くねらいに迫れると考える。従って、ここでは、単なるペア対話ではなく、「ペア・インタビュー」により児童の自発性を促し、一人ひとりが考えを思いのままに表現できる機会とする。



思考を表現に置き換える



互いの考えを比較する



自分の思いや考えと結び付ける



自分の考えを形成する

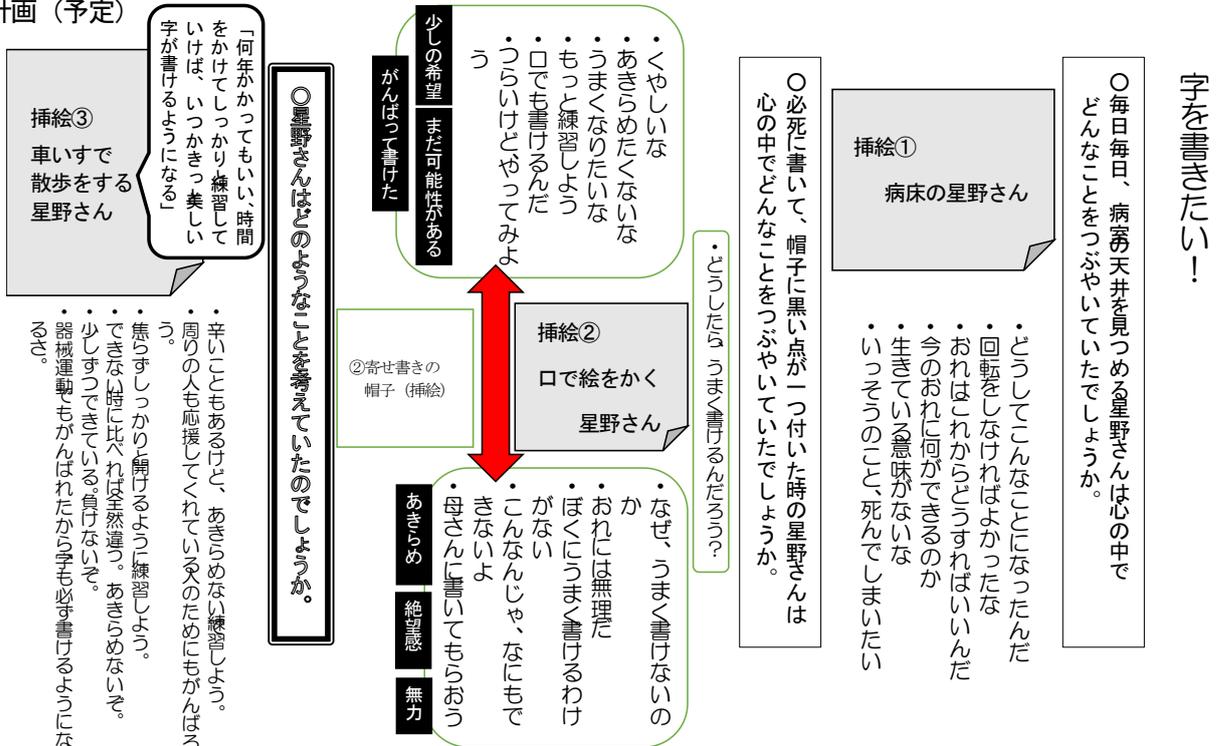
(3) 指導過程

欄	学習活動	○主な働きかけ ・ 予想される児童の反応	◆指導上の留意点
導入 5分	1 主人公の境遇や写真から本時の学習課題をもつ。 	○これは何でしょうか？ ・折れ線グラフかな？ ・何か宝の地図かな？ ・文字にも見えるな。 ○星野さんがどうして文字がかけようになったのか？みんな考えていきましょう。 ※資料を読む	◆写真を提示し、主人公や場面状況について簡単に説明する中で、主題やねらいにかかわる学習課題をもたせる。
展開 35分	2 資料を読み、星野さんの行動や気持ちについて考える。     3 自分とのかかわりの中で自己を見つめる。	○毎日毎日、病室の天井を見つめる星野さんは心の中でどんなことをつぶやいていたのでしょうか。 ・どうしてこんなことに…。 ・回転を見せなければよかったな。 ・生きている意味がないな。 ・動かないなら死んだほうがまだ。 ・どうしよう。 ・何かしたい。 ○必死に書いて、帽子に黒い点が一つ付いた時の星野さんは心の中でどんなことをつぶやいていたのでしょうか。 ・くやしいな。書けるようになりたい。 ・上手になりたいな。 ・あきらめたくないな。 ・もっと練習してみよう。 ・どうしたら上手く書けるのか。 ・なぜ、上手く書けないのかな。 ・お母さんに書いてもらおう。 ・自分には無理だ。 ○「何年かかってもいい、時間をかけてしっかりと練習していけば、いつかきっと美しい字が書けるようになる」と話す星野さんはどのようなことを考えていたのでしょうか。 ・辛いこともあるけど、あきらめないで練習しよう。 ・周りの人も応援してくれている人のためにもがんばろう。 ・焦らずしっかりと書けるように練習しよう。 ・できない時に比べれば全然違う。あきらめないぞ。 ・少しずつできている。負けないぞ。 ・器械運動でもがんばれたから、字も必ず書けるようになるさ。 ○みなさんは、これまでできないことができるようになったことはありませんか。星野さんのようにがんばっていますか。星野さんから学んだことや気付いたことをまとめましょう。 ・跳び箱が跳べた。 ・あきらめない気持ちで大事だな。 ・漢字テストも再テストしなくなった。 ・私もがんばれるかな。 ※その後、星野さんの言葉を読み上げる。	◆発問時に挿絵を提示し、場面状況を想起させる。 ◆ペア対話や全体に挙手を求める方法を工夫し、みんなで作って、意見交流ができるよう努める。 ◆主人公の気持ちを深く考えさせるため、理想と現実の違いに苦悩する気持ちと希望をつなぐ前向きな気持ちの2つに絞り、補助発問「たった一つでも書けた」のか「たった一つしか書けない」とするのか、理由と共に具体的に考えさせる。 ◆主人公の心の中をつぶやきの中から、心を支えていた「もの」を見出し、価値理解を深める。 ◆発表を前提としない。状況を見て反応だけ確認する。A5シートを配付し、書く時間を十分に確保する。
終末 5分	4 教師の説話を聞く。	○先生も時間がかかったけれど、がんばってできるようになったことがあります。先生のお話を聞きましょう。 ・先生も失敗したり、あきらめたりしたことあったんだ。 ・先生も星野さんのように乗り越えたんだな。	◆失敗を重ね、一度あきらめたが、くじけず練習してできるようになった経験を端的に話す。

5 本時の指導過程や指導方法に関する評価

<p>児童に関する評価</p>	<p>・あきらめないで字を書こうと努力し続けた星野さんの内面を共感的に理解し、主人公を支えていた強い心について話し合うことを通して、自分で決めたことを粘り強くやり続けようとする気持ちを持ったか。</p> <p>【方法：行動観察 ワークシート】</p>
<p>指導に関する評価</p> <p>(1) </p> <p>(2)    </p>	<p>(1) 導入での写真や図の掲示による問いの投げ掛けは、主人公の生き方に興味や関心をもち、学習活動に向かうために有効であったか。</p> <p>【方法：ワークシート 行動観察 発言】</p> <p>(2) ペア・インタビューを通して、児童の自発性を促し、理想と現実の違いに苦悩する気持ちや希望をつなぐ前向きな気持ちなど複雑に揺れ動く心の葛藤に気付くための手立てとして有効であったか。</p> <p>【方法：行動観察 発言】</p>

6 板書計画（予定）



7 その他〈本時ワークシート〉

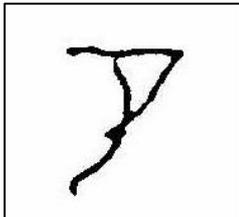
「字を書きたい！」

名前

◎今日の学習で学んだことや気付いたことはどんなことですか。(感想)

Large empty rounded rectangle for writing the student's感想 (reflection).

《「導入」における提示資料（サブ黒板）》★資料への導入



初めて書いた文字



運動が大好き 体育教師



生死にかかわる大げが

首から下が動かない

子どもたちに導入で
与える情報



星野 富弘さん

《「展開」における挿絵や提示資料》



基本発問①（挿絵①）



基本発問②-1（挿絵②）



基本発問②-2



中心発問直前



中心発問（挿絵③）



展開後段に言葉を紹介する

◆主な授業の流れ（画像）



↑星野さんの「言葉」紹介





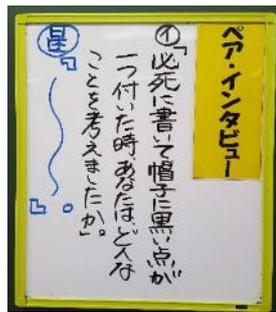
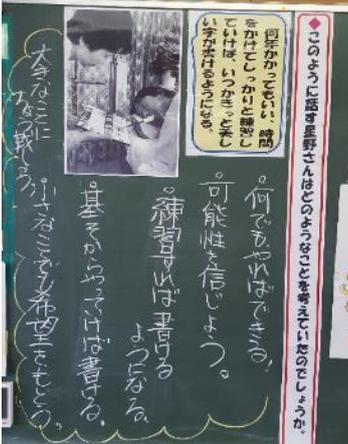
↓自己を見つめる時間



←中心発問での
児童の反応

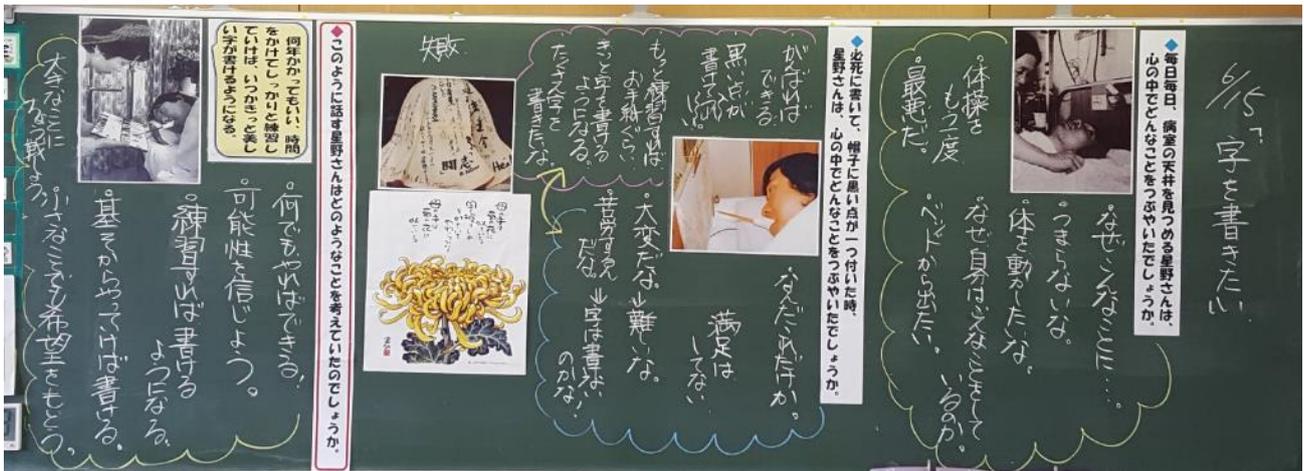
◆最終板書

(1) 補助黒板



←「ペア・インタビュー」流れの提示

(2) メイン黒板



授業研究 協議会

I 授業者自評

1 《手立て①》「資料への導入」について

- 「首から下が動かない。どんな文字の書き方をしたのか」と発問したとき、子どもたちは首を押さえてみたり、顔を動かしてみたり、星野さんの気持ちになってジェスチャーを始めた。「星野さんは、あとで絵もかけるようになりました。」と説明した時に「どんな絵を描いたの?」と関心をもって星野さんの文字の書き方や絵画作品に興味をもった。教材との出会いは十分であり、資料の効果は有効であった。
- 予定した5分を過ぎてしまったため、そのしわ寄せが展開後半の書く時間の不足に現れてしまった。書く時間をあと3分くらい確保してあげたかった。

2 《手立て②》「ペア・インタビュー」について

「ペア・インタビュー」後の話し合いの流れ（授業記録より）

※基本発問②後の「ペア・インタビュー」を終えて…。
T1: では、星野さんへの取材の結果を発表してください。
C1: 自分もがんばればこんなことができるんだ。
C2: うれしい。黒い点が付いただけでも…。
C3: 黒い点だけだったけど、もっと練習すればお手紙ぐらい書けるかな?
C4: 黒い点を一つ書いただけでも大変だったなあ。
C5: 黒い点を一つ書くことができたから、これからがんばればきっと字が書けるようになる。
C6: 黒い点が一つ書くのに大変だったけど、うれしかったな。
C7: えっと…これからたくさん練習してもっとたくさん字が書きたいなあ。
C8: 私もみんなと同じで「点を一つ書くのにこんな苦労するんだな…。」
T2: これら意見とは別に前向きなつづやきでない人はいませんか? どうですか?
T3: Oさんの意見を紹介してください。何て答えていましたか?
C9: ぼくは、「これだけか…。」だった。
T4: どうして、そう考えたの?
C10: なんでって…点が一つだけだったから…。
T5: Oさんは、そう言っているけれど、他のみんなはどう思う?
C11: 確かに…黒い点だけだったし、でも、首が動かせないからなあ。
C12: 確かに、これだけだったけど…体が動かないからな。
C13: 今まで、文字も何も書けなかったのに口で書けたのはうれしいと思うけどな。
T6: Oさんにインタビューした隣のRさんはOさんのつづやきを聞いてどう思いましたか?
C14: 満足はしていないと思う…。
C15: 私も満足はしていないと思う。もうちょっと普通の人と同じですらすら書けるようになりたかったんじゃないかな。
T7: さっき「…大変だな」と言った人たちは「大変だな…がんばろう」なのか「大変だな…難しいな」と思っているのか、どっちなんだろう?
C16: 難しい…。
C17: 字が書けなくなっちゃってるんだな…。
T8: 前向きな気持ちと不安で心配な気持ちとどっちの方が強いと思う?
※挙手（前向きな気持ち 15 人、不安な気持ち 6 人）
T9: 星野さんの気持ちは、みんなが話し合ったように前向きな気持ちと不安な気持ちとどちらもあって、複雑で葛藤していたのかもしれないね。これがT君へ書いた星野さんのサインです。（「お富」の点だけを説明する）
T10: このあと、星野さんはこれら気持ちを乗り越えて、この状況から絵まで書けるようになりました。
C18: 見せて見せて…。
C19: どんな絵なの?
T11: ほら、これね。（絵を見せる）手じゃないんだぞ。
C20: すげえー!
C21: 嘘だろ?
※中心発問へ

- 子どもたちはいつもどおりの雰囲気で行っていた。基本発問①で星野さんの絶望や無気力な気持ちを想像すればするほど、基本発問②の「黒い点一つ付いた時の気持ち」は、希望や可能性を見出すプラスの気持ちが多くなるだろうと予想された。結果はそのとおりだった。しかし、Oさんの悲観的な発言「これだけか…」から切り込み、広げていくことで、反対にあきらめかけた気持ちを葛藤する星野さんの気持ちを深く考えることができた。「ぼくはそうは思わなかったけど…インタビューを聞いてなるほどと思った」「確かに満足はしてないかな…」など、教師が他の子どもたちとのつなぎ役になることで、もう一步深く考えることができた。
- 1つのつづやきをもとに、子どもたちにも動揺（星野さんの葛藤）が見られた。「がんばればこんなことができる」「うれしかった」と発言した子どもたちもOさんの意見を聞いて、周りの友だちと再度情報交換をしていた。

3 その他

- ・終末に教師の説話を予定していたが、中心発問場面での子どもたちの発言や反応、そして展開後段の振り返りシートの記事から、授業者は本時のねらいを達成していると確認した。従って、授業者の説話よりも、展開後段で読み上げた星野さんの「言葉」をメッセージとし、余韻を残して終わるほうが、子どもたちにとってより効果的であると考えた。

II 参観者の主な感想（グループ協議より）

1 《手立て①》「資料への導入」について

- ・資料にひきつけられていた。食い入るように見ている子どもたち。じつと静かに挿絵（資料）を見ている子どもたちがいた。安心して声が出せるクラスの雰囲気、友だちとのかかわりの雰囲気が良い。

2 《手立て②》「ペア・インタビュー」について

- ・基本発問①では、「一人で考える→ペアで考える」という段階があった上で、基本発問②での「ペア・インタビュー」は子どもたちの雰囲気もよくよかった。同じ内容を発言するペアはあまり時間が要らない、しかし、互いに意見が違ふペアはそのことについて情報交換をしていた。どのように時間設定をすればよいか難しいなど思った。

3 その他

- ・メイン黒板ではなく、ホワイトボード（補助黒板）を導入で活用したことで、授業を進めていく上でメリハリがあった。他の教科でも活用できそうである。
- ・挿絵が発問とマッチしていること、挿絵を見せ、想像させながら発問をしていくことで、自然な流れの中で子どもたちに星野さんの気持ちを考えさせることができたと感じた。
- ・みんなが議論に参加していた。授業者が子どもたちのつづやきを細かく拾い、つなぎ役になっていた。
- ・導入に「絵まで描けるようになった」というところで、敢えて絵は見せないで、中心発問に向かう直前で絵を出したタイミングはとても効果的であった。子どもたちが感動するような反応を示していた。導入で「どんな絵を描いたんだろう？」と思っていた子どもたちが、中心発問の直前ですばらしい絵を描いた星野さんについて「あきらめなないで、根気強く、努力して書いたんだ」と実感することができていたと思う。中心発問でねらいを達成するには効果的だった。

★糸魚川市立田沢小学校 猪又 英一校長 指導

- ・単に「人と話す」のではなく、授業者のねらいがあってペアトークにする。そのための働き掛けもそうである。授業者の導入での資料提示やペア対話、「ペア・インタビュー」にはすべて意味や意図がある。「ペア・インタビュー」は、取材をすることで、星野さんになって正にその場で話さなければならない状況をつくっている。即興で話すところに、子どもたちそれぞれの星野さんに自我関与した心の声が聞こえる。教材研究がしっかりとともとなっているのがわかる。導入で授業の8割が決まる。何を提示すれば子どもたちは感じるのか。教材選定が命。
- ・指導案の中で授業者は児童の課題を書くものであるが、授業者は、これまでの学級での取組からさらに子どもたちを伸ばしたい力について書いているのが素晴らしい。マイナス面を捉えるのではなく、現在からよりよくなるよう目指している。
- ・自分と違う考えに触れる、様々な意見を比較して考えられるような構造的な板書も事前に計画され練られている。反対の意見を取り上げながら、話し合いを展開していくその技術を皆さんも学んでほしい。